魔界のレストラン

いちは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界のレストラン

【Nコード】

N5519J

【作者名】

いちは

【あらすじ】

魔界のレストランを舞台にした風刺小説です。

ここは魔界のレストラン。
エリート悪魔しか入れない、超高級レストランだ。

昨日、懇意にしているオーナーから「レアものが入った」という連絡があった。

魔界一のグルメと自負する私は、本日、早速ここへ来たのだ。

一番奥の席へ通されると、まず食前酒が運ばれてきた。

「大量殺人を犯した人間の魂を発酵させたワインです」

ああ、もったいぶって。

この手のワインは飲み飽きた。

二千年の間、同じようなワインは量産されている。

前菜。

「小悪党の脳みそのマリネでございます」

食べ飽きたメニューにウンザリした私は、思わず強い口調で言った。

「良いから、メインを出し給え、メインを!!!」

ウェイターは、三つの目を三つとも閉じて、赤い冷や汗を流しながら厨房へ戻った。

今度は、シェフとオーナーが出てきた。

シェフが言った。

「上物の肉です」

皿上の小さな肉。

これが、上物？

訝しげな顔の私にオーナーが微笑んだ。

「日本という国で、総理大臣をつとめた者の舌肉でございます。」

腹肉は、色は黒くて味は鳩肉、とても出せるものではございませんが、舌肉は見た目も素晴らしく、きつとお気に召しましょう」「ほほう。」

どこの国であれ政財界トップの人間の肉は、噛むと濃厚な悪汁がにじみ出てくる。

そしてそれが、えもいわれぬ美味なのだ。

私は、思わず知らず、舌なめずりをした。興奮しすぎて、舌先が自分の耳にまで触れた。

フォークに刺した舌肉を頬張ろうとした、その時。

少し離れた席に、ライバル悪魔のギャジが座っているのに気づいた。

ギャジは、すでにこちらに気づいていたようで、

私のほうをニヤニヤと見ていた。

ギャジは成り上がりのエリート悪魔だ。

私のような伝統ある魔系の悪魔とは違う。

「これはこれは、ギャジさん。奇遇ですね。」

小悪党の脳のマリネでも堪能されていますか？」

皮肉を込めて、私は言った。

ギャジは、

「いえいえ。今日は、レア物が入ったということにして、へへへ。」

生粋のエリートの貴方でも手に入るかどうか」

軽薄そうな笑顔を浮かべて答えた。

「ほほう、どんなものですか、そのレア物とは？」

聖人の頬肉ですか？ それとも」

「日本の総理大臣の舌、ですよ」

ギャジは私を遮り言い、それを聞いた私はオーナーを睨みつけた。どういうことだ。

「オーナー、説明してもらおうか。」

私と彼、どちらかに二セモノを出しているのかね」

私は、怒りを抑えながら言った。

「オーナーは穏やかに、

「いえいえ。どちらもホンモノでございます」

そう言つて、深々とお辞儀をして続けた。

「この総理大臣は、素晴らしい二枚舌の持ち主だったのでござい
ます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5519j/>

魔界のレストラン

2010年10月21日23時04分発行